

にして、「何を主題にしてほしいのか」という声が係を中心にあがる。また、各小学校での実践をどう中学1年生の実践でつなげていけばよいのかという声もある。こうしたなかで、「須崎市人権同和教育指導計画」の果たす役割は大きく、今回は5年生の主題をもとに試行・検討することとなった。

3 研究の成果

(1) 指導の実際

本時では、『あけぼの』の教材である「おらあ 学校へ行ってえ」を劇にして発表することを活動目標にしながら、劇の練習を通して部落差別に立ち向かう保科校長先生の思いに共感することを主眼にして授業を構成した。

教材に登場する保科校長先生をはじめ、子どもたちや子どもの親たちの思いをより深く受けとめていくために、核になる発問を設定し、それに対する子どもたちの発言から登場人物たちの思いに迫ることができた。

特に、「どうして保科校長先生は親たちが反対しているのに子どもたちを学校へ行かせようとしたのか」という発問に関わっては、多くの子どもたちから登場人物の子どもたちや校長先生に思いに共感した意見を聞くことができた。そして、終末の劇の練習では、保科校長先生の役をやった男子の力強い演技に対して拍手が起こった。

(2) この事例から明らかになったこと

「須崎市人権同和教育指導計画」を試行した結果、指導計画の適切性が明らかになるとともに、より実践の具体に即した指導展開をつくることができた。また、実践にあたっては、5年敬組のように普段からの開かれた学級づくりが大切であることを改めて認識した。

4 来年度への課題

- (1) 2年続けて指導していただいた網干先生のご指導を今後の研究内容に取り入れていく。
- (2) 須崎市の人権同和教育の手引き書に依拠しながら、さらに研究を深めていきたい。
- (3) 授業研究以外の研究も認めてもらえるとありがたい。

